



イト先を探し出し、連絡を取り、履歴書を持って面接に出来る。

「役者、と言っても死体の役だったりするんですが(笑)、仕事が入るのは本当に急なんです。それに対応できるバイトとなると、少なかったですね。ビルの窓ガラス拭きは知り合いに頼まれてやったんですが、ゴンドラに乗っての清掃は、掃だったからできました。足が宙ぶらりんになるブランコロープに釣られての清掃は、さすがに無理でした(笑)」

書くこととの出会いは小学生のとき。

「何年生だったかは覚えてないですが、宿題で作文を書いたんです。それを先生が徳島新聞のコンクールみたいなのに出したらしく、新聞に載りました。何か賞をもらったんだと思うんですけど…何だったのか(笑)」

作文のタイトルは『私はみかん』。自分がみかんになって、みかんの目を通して周りに見える光景を描写したものだそう。

「夏目漱石の『我が輩は猫である』のパクリです(笑)」

この発想力が、後に今の彼女に繋がって行く。

大学卒業後、シナリオ作家協会主催のシナリオ講座を受講しているときに、講師で脚本家の松本功氏に出会う。

「発想が変だから、脚本家になりませんかって声をかけられて(笑)。女優になるコネ作りにいいかなぐくらしいの軽い気持ちで始めました」

松本氏に師事し、氏が書く脚本の下書きをしていた。『はぐれ刑事純情派』では、旺季さんの下書きを松本氏が手直しし、藤田まことらが演じて大ヒットドラマシリーズになった。

「その中で、私が書いた決めゼリフが直されてなくて、岡本麗さんがそのままを言ったんです。スゴくうれしかったですね。認められたような気がして。その1本が私を大きく変えました」

5年ほどして、一本立ち。映画『借王』で旺季志ずかとして脚本家デビューした。

彼女が描く世界には、実体験の子どもの頃の心象風景や周囲とのふれあいの様子も登場する。『佐賀のがばいばあちゃん』では、おばあちゃん子だった子ども時代の、祖母との関わり方が描かれた。

「おばあちゃんものにはほぼ、徳島での体験が出てきてるかも(笑)」